様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１５８７０

研究課題名（和文）わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援に関する研究

研究課題名（英文）Study on the support of mothers who are troubled by gender dysphoria in their children

研究代表者
菊地　美帆（KIKUCHI, Miho）

常葉大学・健康科学部・准教授

研究者番号：００５５３３２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援について検討することである。中学生までの子どもを持つ母親に性同一性障害（GID）についての理解やわが子の性別違和感に対する悩みの有無について質問紙調査を実施した。次に、GIDの子どもを持つ母親に、子どもの幼少期の様子や母親の思いについてのインタビュー調査を実施した。その結果、現在わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援としては、GIDの子どもを持つ母親とのピアサポートが適していると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　将来的に性別違和と診断される者は、幼児期からすでに性別違和を自覚し、悩みを抱えながら生活していることが多い。また母親も、わが子の性別違和が気になっていたり、悩みや不安を抱えていると思われる。悩みを抱える母親を支援することで、母親がわが子を理解し、性別違和を自覚する子どもが適切な時期に支援や治療が受けられるようになれば、母親への支援はひいては子どもへの支援ともなり得ると考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to consider the ideal form of support for mothers who are troubled by gender dysphoria in their children. First, I conducted a questionnaire survey of mothers with children up to junior high school student age and asked them about their children and their understanding of gender identity disorder (GID). Second, I conducted interviews with mothers who have children with GID and asked about their child's childhood and the mother's emotions.
As a result, I concluded that the ideal support for mothers who have trouble accepting gender dysphoria in their children, is peer support with other mothers who have children with GID.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：性別違和　子ども　母親　支援

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

性別違和（Gender Dysphoria）を取り巻く環境は急速に変化し、性の多様性を容認した社会のあり方が求められるようになってきた。2013 年には、国公私立の小中高校と特別支援学校において性別違和の児童生徒の現状と支援状況について全国調査が実施されるまでとなった。性別違和の自覚について、FTM（female to male）では、小学校入学以前（物心ついた頃から）が 74.4%であり、MTF（male to female）では、小学校入学以前が 32.8%であり、小学校の高学年までには 56.3%が自覚しており、幼児期からすでに性別違和を自覚していることが多い[1)]。ズッカーらは反対性に対して心理的に強く同一化している行動は、就学前の年限（2～4 歳）に発現する[2)]としており、将来的に性別違和と診断される者は、小学校入学前から多くのサインを母親に発していると思われる。しかし、誰にも打ち明けられずに悩み成長した子どもの多くは、学童期や思春期に他の児童生徒からのいじめや仲間外れが原因で、不登校やひきこもり、自傷・自殺念慮まで発展している[3)]。性別違和の問題は当事者だけの問題ではなく家族を巻き込む問題である。母親はわが子からカミングアウトされる以前に、わが子の性別違和を予感していたり[4) 5)]、カミングアウトされた後に、わが子の過去の行動を振り返り性別違和を確信し、見逃したことを後悔する[4)]。母親が子どもの気になる行動に気づきながらも見逃してしまった時の母親の心理状態や行動、母親の想いが明らかになれば、現在わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援を考える手がかりとなると考える。家族の理解によって、性別違和を自覚する子どもが適切な時期に支援や治療が受けられるようになれば、母親への支援はひいては性別違和の子どもへの支援ともなり得る。

２．研究の目的

本研究の目的は、わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援について検討することである。

３．研究の方法

（１）中学生までの子どもを持つ母親への無記名自記式質問紙調査による量的研究

①調査目的：中学生までの子どもを持つ母親の GID についての理解やわが子の性別違和感に対する悩みの有無を明らかにする。

②対象者： 研究に同意が得られた保育園などの年長組の子ども（5 歳から 6 歳児）を持つ母親および小学校・中学校に通う子どもを持つ母親。

③調査期間：平成 28 年 2 月から平成 29 年 9 月。

④データ収集方法：GID に関する無記名自記式質問紙による留置き調査。

⑤主な質問項目：・基本的属性　・GID についての理解　・子どもの言動から子どもの性別違和感について気になることの有無とその内容　・気になる言動がみられた時期　など。

⑥分析方法：データは統計ソフト SPSS ver23 を用い集計・分析を行った。統計学的解析は x^2 検定を行ない、有意水準を 5%未満とした。

（２）GID 当事者の母への半構造的面接による質的研究

①調査目的：すでにわが子からカミングアウトされた母親の、わが子に性典型的行動が見られた時の思いや体験を明らかにする。

②対象者：すでにカミングアウトした 20 歳から 30 歳代の GID の子どもを持つ母親、FtM の母親 3 名、MtF の母親 1 名の計 4 名。

③調査期間：平成 29 年 7 月から平成 30 年 4 月。

④データ収集方法：GID 関連の支援グループの代表者に本研究の概要の説明および研究協力を依頼し同意を得た。代表者より対象となる母親に本研究の概要の説明および研究協力を依頼して頂き承諾を得たのち、後日研究者が対象となる母親に連絡をとり面談をした。研究者が対象となる母親に対し、書面にて本研究の概要の説明および研究協力を依頼し同意書を取り交わした。インタビューはプライバシーが保たれるよう配慮し、インタビューガイドに沿い半構造的面接を行った。また許可を得て録音させて頂いた。

⑤主な質問項目：・子どもの幼少期の様子　・子どもの性別違和感が気になった時期と子どもの年齢、その時の母親の思いや悩み　・子どもからかミングアウトされた時期、その時の思い　・現在、性別違和感のある子どもに対してどのような理解や対応が必要か　・周囲の人たちに望むこと　・現在、性別違和感のある子どもを持つお母さんにはどのような支援が必要と思うか　など。

⑥分析方法：インタビュー内容から逐語録を作成した。逐語録から上記調査項目の視点に沿って、それらに関する語りの部分について文脈を損なわないように抽出した。その内容を解釈・要約してコード化した。それらを類似性に従いまとめた。

（１）および（２）の研究は、本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 15035）。

（３）（１）および（２）の研究の結果より、わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援について検討した。

４．研究成果

（１）中学生までの子どもを持つ母親への無記名自記式質問紙調査による量的研究

回収数 612 部（34.8%）、有効回答は 466 部（76.1%）であり、5 歳から 6 歳児の母親 95 名（20.3%）、小学生の母親 251 名（53.9%）、中学生の母親 120 名（25.8%）であった。

「GID」という言葉を知っていた母親は 464 名（99.6%）であった。主な情報源はテレビやラジオ 94.0%、インターネット 27.9%であり、GID の知人がいるは 12.0%であった。

「GID」という言葉を知っていた母親 464 名を分析した結果、「GID の人を理解している」411 名（88.6%）と「GID の人と関わったことがある」138 名（29.7%）、ならびに「GID の人を理解している」と「GID について知っている」297 名（64.0%）との関係に有意な差がみられた。また、「GID の人を理解している」と「子どもと GID について話をしたことがある」118 名(25.4%)との関係に有意な差がみられた。「GID の人を理解している」と母親の年齢や職業との関係には有意な差はみられなかった。

わが子の性別違和感に関し気になる母親は 7 名（1.5%）であり、5 歳から 6 歳の母親 1 名、小学生の母親 6 名、中学生の母親 0 名であった。気になる言動がみられた時の子どもの年齢は、2 歳から 3 歳が 2 名、4 歳から 5 歳が 1 名、9 歳から 10 歳が 4 名であった。気になる項目は、言葉遣い、服装、遊び方、友人関係、髪型など複数あり、なかには明らかに性別違和感を訴えている子どももいた。7 名中 5 名の母親が、子どもの気になる言動について家族や担任、カウンセラーに相談していた。「現在わが子の性別違和感に悩みがある」と答えた母親は 2 名であり、将来への不安などを挙げていた。

以上より、GID の人の理解は、母親の年齢や職業よりも「関わり」や「GID を知っている」ことが関係していた。また、GID の人の理解が子どもとの会話にも関係していた。子どもが性別違和感を自覚し始める小学校入学前、また第二次性徴期のころにわが子の性別違和感が気になる母親もいることが明らかになった。わが子の性別違和感に悩みを抱える母親もおり、子どもへの支援同様に母親への支援についても考えていく必要性が示唆された。

（２）GID 当事者の母への半構造的面接による質的研究

研究対象者は、FtM の母親 3 名、MtF の母親 1 名の計 4 名である。母親の年齢は 50 歳代 2 名、60 歳代 2 名であり、子どもの年齢は 20 歳代 2 名、30 歳代 2 名であった。

①子どもの性別違和を知った時期は、子どもが中学生の時が 1 名、大学生の時が 2 名、大学卒業後が 1 名であり、そのきっかけは、スクールカウンセラーから聞いた母親が 1 名、子どもからの直接のカミングアウトで知った母親が 1 名、子どもの友達から教えてもらった母親が 1 名、母親から子どもに尋ねて知ったのが 1 名であった。子どもの性別違和を知った時期やきっかけには様々な背景があった。

②幼少期の子どもの様子については、FtM3 名中 1 名は「普通の女の子」で母親から見てまったく気になることがなかった。他 2 名はショートカットで「男の子と遊び」「スカートを履かない」活発な幼少期を過ごしていた。また制服のスカートを嫌がった。2 名の母親たちは「全く違和感がなく」「自然なこと」として受け止めていた。MtF の母親は、子どもの性別違和を知るまで「全く気配もなく」気付いていなかった。

③子どもの性別違和を知った時の母親の思いは、これまでの子どもに起きた様々な出来事の理由が分かり「すべて腑に落ちた」「やっと合点がいった」という思いやびっくりし「どうしよう」と思った母親や、「やっぱり」と思った母親もいた。また同時に子どもに対し「もっと早く言えばよかったのに」と思っていたり、「これから前に進める」、「子どもの気持ちを支援しなければいけない」と思っていた。母親はこれまでの子どもの苦しみを思いかわいそうに思い、「生き難くなる」子どもの将来を心配していた。子どもの性別違和を知った後、性別違和について勉強していた母親もいた。ある母親は当時「支援グループが近くにあれば心強かっただろう」「今のようなにもっと情報があれば良かった」と回想していた。まだ性別適合手術を受けていない子どもを持つ母親は、手術後の身体の変化などについて心配していた。

④現在、性別違和感のある子どもに対しての理解や対応については、子どもに対し「悩んでいるなら言ってもいい」「気持ちを表現していい」と言ってあげたい。また、子どもが気持ちを言えるような環境を望んでいた。親も大人になって子どもを受け入れていくことが必要であると語っていた。

⑤現在、性別違和感のある子どもを持つ母親への支援については、周囲の人たちは、子どものことも母親のことも否定せず、今までと変わらないお付き合いをする。また、母親たちには「同じような境遇の母親との横のつながり」や「悩みが言える環境」が必要であると語っていた。

⑥周囲の人たちに望むこととしては、「性別違和感がある子どもたちがいることを理解し見守ってほしい」、すべてを「男・女で分けない」で、その子自身を受け入れる環境を望んでいた。幼少期は学校でかなりの時間を過ごすため「教員の気配り」が必要となる。教員は「性別違和の子どもが近くにいる事を認識し」、「性別違和についての知識を得る」ことを望んでいた。また社会的には「同性婚などの法の整備」を望んでいた。

母親たちは、現在の GID の人たちを取り巻く環境を変えていくために、母親自らが周囲の人たちに GID の人たちがいることを伝えていくことや、自分自身にできることは何かを模索していた。

（３）わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援についての検討した

（１）の調査より、わが子の性別違和感に対し気になる母親が７名（1.5%）いたこと、（２）の調査より、当時支援グループの存在やGIDに関する情報を必要としていたこと、悩みを抱える母親たちへの支援には、「同じような境遇の母親との横のつながり」や「悩みが言える環境」が必要であることが明らかとなった。また、GIDの子どもを持つ母親たちは、現在のGIDの人たちを取り巻く環境を変えていくために、自分自身にできることを模索していた。

以上の結果より、現在わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親への支援としては、GIDの子どもを持つ母親とのピアサポートがお互いの母親たちにとって適しているのではないかと考える。また、母親たちが必要とする情報や知識が得られるような機会を持つことも必要である。

今後の展開として今回の結果を踏まえ、現在わが子の性別違和に対し悩みを抱える母親とGIDの子どもを持つ母親とのピアサポートグループを開催し、グループがもたらす効果などを検討する。

＜引用文献＞

１）中塚 幹也，安達 美和，佐々木 愛子他．性同一性障害の説明、ホルモン療法、手術療法を希望する年齢に関する調査．母性衛生．46巻4号．543-549．2006．
２）K.J.ズッカー、S.J.ブラッドレー．性同一性障害　児童期・青年期の問題と理解．みすず書房．東京．2010.
３）中塚 幹也,江見弥生．思春期の性同一性障害症例の社会的、精神的、身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討．母性衛生．45巻2号．278-284．2004.
４）長谷川眞弓．アキラ　性同一性障害の子を持つということ．ミリオン・スマイル．2012.
５）荘島幸子．性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し．発達心理学研究．21巻1号．83-94．2010.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０ 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

① 菊地美帆　久保田君枝．中学生までの子どもを持つ母親の性同一性障害についての理解とわが子に関する悩み．第21回GID学会，2019年

② 菊地美帆　久保田君枝．5歳から6歳児を持つ母親の性同一性障害についての認識．第59回日本母性衛生学会，2018年

６．研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

研究協力者氏名：久保田 君枝

ローマ字氏名：(KUBOTA, Kimie)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。